一、當國永代德政之儀、其催をなすよし、言語道斷の次第候。此段申觸本人尋さぐり、成敗あるべく候。

一、連々靜謐之事申下候處、以少々儀、細々(再々)及具足懸旨聞得候。無事之段被申付筋目候哉。しかしながら國錯亂の基までに候。諸篇各贔屓偏頗候故如此候。千萬々々勿體なく候。所詮向後寄事於左右帶兵具輩にをひては、不謂理非爲郡中可被成敗候。

一、寄合之時不出之人數多之由候。以外不可然候。於已後者先々のごとく、不違時日みな〳〵可被罷出候。

一、從此方總中へ申下事、存知なき衆數多候儀、いかゞ候哉、不審に覺候。

一、於所々、五帖之書の外に深儀候之由申扱旨　其聞候。以外次第、一流のみだれ不可過之候。抑彼文は、經釋の勸文をやはらげ、爲愚鈍之輩令撰集給ふ也。當流の儀は、雜行雜善をさしをき、只一念無疑(疑カ)に阿彌陀佛をたのみ、往生治定のうへには報謝の念佛申計にて候。更に別の子細あるまじく候。

一、佛法の次第よく〳〵聽聞候て、眞實の信心に住せられ候はゞ、其身は勝德たるべく候。又此方も本意に候。おの〳〵依無法義、如此みだれがはしき事共候。此等之旨分別肝要候。相構て〳〵皆々一味候て、諸事申合られ候べく候。爲其兩三人さしくだし候。あなかしこ〳〵。

(天文六年)八月廿三日　　證　如　在判

石川郡中へ

(若松方は河北郡若松本泉寺蓮悟をいふ。天文日記元文六年八月廿六日の條參照。)

十一月。鳳至郡總持寺領諸岡村常友名・國時名の百姓等、同寺に、納租の額に就いて契約す。

【總持寺文書】鳳至郡　　**一二七四**

龜山御寄進兩名之御年貢者、拾貫五百文也。但國時名之內壹貫五百文、川成ニより、此四五ヶ年者九貫文寺納申候處ニ、今度堅御尋之間委申分、伍百文者定免ニ被仰付旨、每年ニ拾貫文充無相違可致納所候。萬一於後日又蒐角之儀申上候者被召上、他作に可被仰付候。其時一儀不可申候。仍而爲後日之一行如件。

天文六年丁酉十一月　日

常友名あいの神右近　略押
清水二郎左衞門　在判
國時百姓中　略押

惣持寺御寄進
納所代禪師

(卷上書)龜山分御百姓等一行

洞川派
當納所　源　巽　在判

(兩名とは常友名と國時名にして、諸岡村の內なること永正十年十二月十七日の條に見えたり。)

天文七年　戊戌　紀元二一九八

三月廿九日。伊勢貞孝、山城天龍寺瑞林院に、石川郡與津屋村を安堵せしむ。

【親俊日記】　**一二七五**

當院領加賀國與津屋村之事、貞陸(伊勢)・貞忠一行之旨無別儀候。彌可被專寺納事可爲肝要候。恐々謹言。

(天文七年)三月廿九日　　貞孝(伊勢)

瑞林院　侍司

○

【親俊日記】　**一二七六**

當院領加賀國石河郡之內與津屋村之事、先年勝蓮院并寶蓮院一行之旨、雖無別儀候、尙以當屋形書狀之事承候間、則申調令進覽候。彌彼在所堅被仰付、可被專寺納事肝要候。恐惶敬白。

(天文七年)三月廿九日　　親俊(鹿川)

瑞林院　侍者禪師

四月五日。元眞、鳳至郡總持寺に、大屋莊三井上村の地を寄進す。

【總持寺文書】鳳至郡　　**一二七七**

能登國鳳氣至郡大屋庄三井上村之內弟谷分、爲光陽院殿御入牌、永代令寄進之者也。仍狀如件。